



「“こんにちは、訪問看護です” って声がしないのが寂しいですね。」

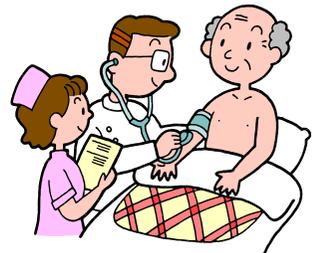
この言葉は、長い療養生活の末、ご自宅で亡くなられたAさんの奥さんが、こちらのお悔やみ訪問時に、おっしゃられた言葉です。

Aさんとの出会いは5年以上前でした。難病をお持ちでしたが、内服コントロールとリハビリ入院後の在宅療養を支援するため、訪問看護が導入となりました。最初の訪問看護では、屋外散歩をしたり、体操をケアに入れ、リハビリを中心に過ごしていました。

Aさんの病気は、自分の体が突然動かなくなったり、動いては転んでしまったり、家族の思いとは関係なく、動けたり動けなかったり…。時には、精神的に混乱されることもあり、本人はもちろん、ご家族、特に奥様の精神的疲労はかなり強いものでした。奥様はその苦悩を吐露し、訪問看護時間のほとんどを、奥様の訴えに傾聴することもありました。

どうやったら在宅生活が継続できるのか、考える日々が続きました。主治医やケアマネジャー、デイサービスなど関連機関とも話し合いをしながら、ショートステイの利用・訪問頻度を増やすなどの対策をとりながら、在宅療養は続けました。

徐々に身体機能低下と食事量の低下がありました。入院するという選択もありましたが、ご本人とご家族は、在宅での療養を希望されました。清拭や点滴



などを行いながら、最期はご自宅で静かに息を引き取りました。

奥様は「辛かったかと問われればそうだし、楽になったかと問われればそうかもしれない、やはり寂しいですね。」と空いたベッドを見ながら、介護生活を振り返られました。「週2回、訪問に来てもらう、それが日課でした。大変な時も相談に乗ってもらって、すごく支えになりました!」奥様の言葉を聞き、私たち訪問看護師が生活の一部となり療養生活の支えとなっていたことを嬉しく思いました。

Aさんの場合、身体状況がその都度変化するため、病気とはわかっていても苛立ち、疲弊してしまうご家族の姿がありました。私たち訪問看護師は、その気持ちを受け止め、少しでも穏やかな気持ちで介護が行えるように相談や助言を行ってきました。そして何とか、ご自宅で看取りまで行うことができました。

介護や療養生活を支えるご家族は、時に強いストレスを抱え、孤独にもなりがちです。相談できる相手を見つけ、ストレスをためないようにするのも長く療養生活を支え続ける秘訣だと思います。



私達は皆様のホームナースです!

訪問看護では、随時介護相談・療養相談にのっています。
お気軽にご相談ください。

訪問看護のお問い合わせは 一之瀬訪問看護ステーション
電話 48-6615 まで